

# ニコリのたね



岡田 陽

## ● 「ニコリのたね」を見て

ぼくは、ふだんはあまり笑わないほうだが、この劇を見てよく笑った。笑いというのは予期せぬ意外性にぶつかった時、思わずでてくるものだ。昨今のテレビのバラエティのように笑いを強要されると、おかしくも何ともなくなってしまふ。

こんなに笑えた児童劇も珍しいが、こんなに汗だくになってがんばっているエネルギッシュな劇を見るのも珍しい。子どもと本気で取り組んでいる大人を見るのは気持ちがいい。

ニコリの花は心に咲く花。想像力と創造力が働かないと、たねは見つからないし、花も咲かないというメッセージは、笑うどころか大まじめで、感動的な勇気ある3人の仲間の話として素直に受けとめたい。

「ニコリのたね」という児童劇は、子どものごっこあそびの延長線のように親しみやすい。笑っているうちに大冒険の世界へぐいぐい引きこんでいく迫力を持っている。

劇というのは、何も無い舞台という空間に、別の世界を現出させることなのだが、「ニコリのたね」は、笑いながら、大冒険の勇気ある行動に思わず声援をおくりたくなる。これは、児童劇の正道をゆくものと言ってよい。

子どもの表現活動の意義が再認識されつつある今、「ニコリのたね」をたたき台として、先生や子ども達が自分達の表現活動について話し合ってもらったらおもしろいと思う。

(おかだ あきら 玉川大学名誉教授)

